

昨日読んだ文庫

西内ミナミ

国民学校にあがった年が敗戦だった。敵機襲来などない瀬戸内の小島に居たので、世代のわりには「戦争体験がない子」。子どもの読書推進活動では、「平和」への想いを、

本・絵本のブックトークなどで伝えてきた。還暦も過ぎた頃になり、日中の児童書の友好交流で南京をおとずれる機会があり読んだのが『南京への道』（本多勝一著・朝日文庫）。長江の南に広がる貧農地帯を日本軍が進軍、侵略してゆく様子はまるで映画でも見たように脳裡に焼き付いた。70年余りの歳月が流れた今、その過去がきっちり清算されたとは思えない。

さて座右の書というよりは、夜ごとひそかに枕元で開くのは『文士の時代』（林忠

彦著・朝日文庫）。坂口安吾がゴミ屋敷然ととっ散らかった部屋で原稿用紙に向かっている写真は、私を勇気づける。主婦兼業作家として家中にメモ、本、書類が散乱する日常にあって「明日こそ、整理整頓に掃除」とのトラウマから解放してくれる向精神薬

である。著者の撮影時を彷彿とさせる文章も味わい深い。ちなみにこの本では煙草も気になる。カバー写真からして三島由紀夫が煙草を手にポーズを決めている。紫煙と名だたる作家群。みな鬼籍の人となったが、時折行く神保町の



「ラドリオ」「ミロンガ」な

どの喫茶店では最近の作家たちが往時の姿を引き継いでいる。

もう一冊。精神神経科領域だが、意外に楽しく読めるのが『診療室にきた赤ずきん』（大平健著・新潮文庫）。人物語療法の世界への副題がついているが、様々な症例で人生の悩みを抱えて訪れる患者さんを大平先生は、童話や昔話を引き合いにだして語りつつ問題解決へと導いていくのだが、これを読むことで、読者が自らの悩みから解放されるケースもあるやに聞く。

「ねむりひめ」「食わず女房」など民話・昔話に混ざって唯一創作のお話である拙著『ぐるんぼのようちえん』が挙がっている。なんとも光栄なことで、以来私は大平健ファンとなり他の岩波新書などへ誘われた。『豊かさの精神病理』もお薦めである。

（子どもの本作家）